

草庵仏教

第116号
(発行日)
2000年2月1日
(発行所)
真宗大谷派 念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人)
土井紀明

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座(浜屋仏壇店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

Bさんとの対話

Tさん「会社に勤めている息子が上司に腹が立って仕方がない。憎たらしいというので、私は息子にアドバイスしたんです」

D「どんなアドバイスをしたんですか」

Tさん「毎日、その上司を心に思い浮かべて、『感謝、感謝』と十回称えてみなさいと、言いました」

D「人に対する感謝というのは、自然に起こるものであつて、感謝・感謝と無理に言うてみても、なかなか本当の感謝はできないのではないですか」

Tさん「でも、感謝というイメージを繰り返し返していると、感謝のイメージ自身がだんだんと心に影響を及ぼしてきて、やがて本当に感謝できるようになると思います」

D「そうですね、そういうことがあるかもしれませんが、ただ、憎い人に感謝できるような人になるということはなかなか実際には難しいと思いませんか」

Tさん「まあそうですね」

D「人に感謝できたり人を愛したりするのは、大変難しいと思います。まあ人間自体そんなに立派なものではないように思います」

Tさん「ええじゃあどういうアドバイスがいいのでしょうか」

D「まず息子さんご自分の心に起こっている、腹立ちの心

や憎しみの心を知ることではないでしょうか。まずそういうところから始めたらどうでしょうか」

Tさん「自分の腹立ちや憎しみや人を怨んでいる心を反省することですか」

D「反省して悔悟するということに、怒りや憎しみの心が起こっている事実そのものを見ることですか」

Tさん「心を見るといふのはどういふことですか」

D「今、自分の心に腹立ちや憎しみや怨む心が起こっているなあという風に、自分に起こっている心の姿を知ることです」

Tさん「それは難しくはないですね」

D「ええ、自分の心がけとか心構えを変えることは難しいけれども、自分の姿の事実を知ることからは、気がつけばいいことですから難しくはないです」

Tさん「怒りや憎しみや怨む心が起こっているなあという姿とどうですか」

D「ええ、今まで上司にばかり向けていた目を自分の心の方に向けてみるのです」

Tさん「方向転換ですか」

D「ええそうですね。それによって息子さん、その腹立ちや怒りの心、そのものが本当は自分自身を苦しめている元じゃあないかと言ってみたらどうでしょうか」

Tさん「ええそうですね、相

手が自分を困らせていたと思つていたけれども、自分の腹立ち心も自分自身を苦しめていたのかもしれない、と自己批判されてくるのです」

D「ええ、そういう自分が少しでも見えてくると、今までのようにただ上司が憎いというのとは違って、自分の心が自分自身を苦しめていたんじゃないかなと自己批判されてくるのではないのでしょうか。そうなる、そう相手ばかりを責められなくなると思いませんか」

Tさん「自分の方にはそのような目が向けられるのです」

D「ええそうですね。そうしたら自己批判の眼が自分に向けられてきますと、その上司によつて自分の中に腹立ちや憎しみの心すなわち煩惱の深い私を知らしめてもらったこと、いわば、上司は私の本当の姿や苦しみの原因を気づかせてくれる縁だったんだということも、うなずかれるようになっていく」

Tさん「ああ、私を困らせる相手が、私の本当の姿を知らせる縁となつて下さるとね」

D「ええ、そういう意味で、このような場合に限らず、何事も困つたことや悩ましいこととは本当の自分、人生のまこととを知らせて下さる縁という意味があるのです。どんな出来事も、そこから深い意味を見出していくことが大事ですね。そういう意味が分からな

いと、結局人生は禍福に翻弄させられてしまいます」

Tさん「腹を立てさせられたり、困らされたりする縁を通して、煩惱の深い私だなあと思はされるのです」

D「けれども、そこだけにとどまるのは、未だ道徳や倫理の世界です」

Tさん「それはどういう意味ですか」

D「自分の煩惱や悪が知れるだけには、自分が救われたことにはなりません。それはまだ自己批判の世界です。道徳の世界です。煩惱悪業の私にかけられていられる無窮の慈悲心にであうことによつて、自分の人生に本当の満足が与えられてくるのです。そこが宗教の世界といえます。自己反省とか自己批判だけにとどまってしまうと、自分の人生の充足とか喜びとか安心といふものは生まれてきません。か、人生に対しての根本的な不満とか不足をまぬがれないです」

Tさん「道徳や自己批判をしていられるだけでは、人生の不満や不足が除かれないということとは人間関係に影響してくるのですか」

D「ええ、大いに影響してきます。人を責めすぎたり人を憎んだりする心の元に、自分の人生に対する不満や憤りがある、それが外に噴出して人間関係が悪くなる場合が多いのではないかと、私は感じています。ですから人間関係を良くしようとするなら、私の人生そのものが満たされ、人生の有り難さを感じるようになることが基礎のようになるのです」

(了)

暁烏敏師の言葉

暁烏敏師いわく。

「南無阿彌陀仏というのには、我等が助かる証拠のために成就して下さった名です。その証拠が我々の口から南無阿彌陀仏と出る。そのいわれが分かるのが「信心まこと」ということである。信心とは、何か難しい議論を覚えるという事ではない。道理を合点することでもない。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」と信ずる。それが信心である。

その弥陀の誓願不思議はどこにあるか。遠いところにあるのではない。既に我々の口に南無阿彌陀仏と現れて下さっている。

二・三日前、ある所へ行ったら、阿彌陀仏は実際においでになるかと聞いたから、そういうことをいうておる貴方自身が実際に有るのか、仮のものではないかと聞き返した。阿彌陀仏は未だかつて死なれたことがないが貴方は殺したら死ぬ。仮のものだからです。仮のものを本当のものだと思っているから、本当のことが分かるのです。

阿彌陀仏の存在はどこで分かるかというと、我々の口に南無阿彌陀仏と現れて下さることではっきりして来る。そしてその南無阿彌陀仏のいわれが、私の心にお受け出来る。それが信心である。我々の口から南無阿彌陀仏が出るということは、十億億

佛土の向こうの仏さるの心です。お釈迦さんには、阿彌陀仏さん「今現在説法」とおっしゃる。「今、現に法を説きたもう」とおっしゃる以上、十億億佛土の向こうの阿彌陀さんのお声が聞こえたのであ

る。お釈迦さんにさういふ声が聞こえたからといって驚くには及ばない。南無阿彌陀仏は、今現在説法の阿彌陀さんのお声であります。南無阿彌陀仏が私の口に現れた時に、阿彌陀さんのお声が聞こえておるのです。それは阿彌陀さんのお声から現れたところの向こうのお浄土にいらつしやる仏さんが、近く私の上に、南無阿彌陀仏として現れて下さる。十億億佛土の向こうに行かにはやえなれないと思つておつた仏さんも極楽も、南無阿彌陀仏を称える信心の中に味わ合わして貰えるのです。

この信心のことを、第十八願に「至心に信樂して我が國に生まれんと欲し」とある。南無阿彌陀仏に引き付けられて、南無阿彌陀仏に向かう心になる。南無阿彌陀仏という諸仏の称名の声が聞こえて、その南無阿彌陀仏の中に仏の本願が聞こえて「南無阿彌陀仏」と仏に向かう心が起こつて、「南無阿彌陀仏」と心から仏の名を呼ぶようになるのです。これが「信心まこと」といふ信心といふのは、仏さんのお心が私の上に具わるのです。私は、仏さんの願いに生かして頂くのである、ということ

が明らかになる。それを信心を得るといふのです。」(暁烏敏『和讃講話集』から)

*この暁烏敏師の講話は、今年一月林暁宇師から送られてきた「鳥越だより」(第一号)の巻頭に載せられていたものである。暁烏敏師は近代の真宗僧侶としてつとに高名な方である。石川県に生まれ、清沢満之の門下として、全国的な規模で御教化をされ、多くの方をお育てになられた。また戦後、大谷派の宗務総長もされた。

師が晩年どのようなお話をされていたか私は知らなかつたが今回、この巻頭言を読ませていただく、師がこのようなお話を晩年になさつていたのかと、思いを新たにしたいのである。大変有り難かつたので転載をさせていただきます。なお林暁宇師は長年暁烏敏師に師事された方で、現在は、石川県の鳥越村に居住されて、主に執筆活動を通じて真宗仏法を多くの人にお伝え下さっている尊者である。

以下、暁烏敏師のこの文章にそつて読後の感想を述べてみたい。

「信心とは、何か難しい議論を覚えるということではない。道理を合点することでもない。」

真宗の信心とは、空や縁起などの仏法の深い道理や筋道を聞いて、それを理解したり納得したりすることではない。誓願の不思議を信じていることである。

「その弥陀の誓願不思議はどこにあるか。遠いところにあるのではない。既に我々の口に南無阿彌陀仏と現れて下さつておる。」阿彌陀仏の存在はどこで分かるかという、我々の口に南無阿彌陀仏と現れて下さることではっきりして来る。」と言われる。

大体「阿彌陀仏の存在」といふことは、コップがあるとか石鹸があるとかがいふように、我々の目に入つて来るような形で「仏が存在している」といふことが認識されるものではない。仏ましますということとは「感じる」ことなのであつて、目に見たり手にふれたりして、その存在が分かるものではない。

では実際の、具体的にどこで「仏まします」と感じられ、また感じられるようになるかという、それは申される念仏においてである。阿彌陀仏が念仏を私たちに与えて下さつて、「これを称えよ」と勧めたもうの、愚かで煩惱に散り乱れている私たちにどうしたら仏にであつてくれるだろうかと、長い間思案下さつて、できあがつた法である。称え初めの頃は分らないが、称えていると、称えられる南無阿彌陀仏にこもつておる仏の慈悲心が浸透してきて、「如来まします」といふことが我々の口に現れる念佛において感じられ、知らされてくるのである。我々の口に現れる南無阿彌陀仏が阿彌陀仏である。南無阿彌陀仏の聲において阿彌陀仏の大悲のまことを感じるの、口のお念仏に阿彌陀仏のお心、仰せ、声を

聞くのであり、感じるのである。「南無阿彌陀仏が私の口に現れた時に、阿彌陀仏のお声が聞こえておるのです。」

「それは阿彌陀仏の念力から現れたところのお声であります。」私の口から現れる念佛は、如来法蔵様が私に「あいたい、あいたい」と、私を思い続けてくださった念力が至り届いて、私の口から現れましますのである。

しかも阿彌陀仏は遠い存在ではない。「十億億佛土の向こうのお浄土にいらつしやる仏さんが、近く私の上に、南無阿彌陀仏として現れて下さる。」絶対無限、永遠の悟りの領域から有限な一粒のいのちの私に、近く寄り添ひ、御身をあらわしてくださる、そのお姿が口に現れる南無阿彌陀仏である。

阿彌陀仏のお心は「第十八願に『至心に信樂して我が國に生まれんと欲し』とある。〔本當に疑いなく我が浄土に生まれるとおもえ〕とあるなかに阿彌陀仏の大悲が端的に表されておる、そのお心に引き付けられ、育てられて、阿彌陀仏に向かう心が起こる。阿彌陀仏の仰せに素直に向かうのである。『南無阿彌陀仏に引き付けられて、南無阿彌陀仏に向かう心になる。』

そこに「仏さんのお心が私の上に具わるのです。」仏のお心が私に至り届いてくださるのである。苦しいときも悲しいときも、南無阿彌陀仏の本願に大安慰をいただくのである。「仏さんの願いに生かして頂くのである。」(了)

真宗聖典講座

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとりの弟子、という相論のそつろらんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人もたすそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかつて、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいうこと、不可説なり。如来よりたまわりの信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

〈歎異鈔第六章第一講〉

(現代語訳)……本願を信じ念仏一行を専修する人たちのなかで、自分の弟子だ、他人の弟子だというやうな争いがあるようだが、それは思いもよらないことだ。親鸞は、弟子は一人ももつていません。そのわけは、私のはからいによって人に念仏を申させているので、私には、その人をわが弟子ともいえず、申すようが、阿彌陀仏の御はからいによって念仏を申すおられる人を、私の弟子であるという念仏とは、この上もなくぶしつけなことだ。人の離合はおもひのままに離れたいもので、一緒に連れそうべき縁があれば連れとなり、離れねばならない縁にもよおされたならば離れていくこともありすのに、「師に背いて、他の人に従って念仏するやうなもの、浄土に往生することはできない」などということは言語道断です。阿彌陀仏からたまわった信心を、自分が与えたもののように、取りかえそうとでもいうのでしようか。そんなことは決してあつてはならないことだ。しかし、よくよく教えを聞き、本願他力の道理にしたがつていくならば、おのづかと、阿彌陀仏の恩も知り、また本願をたのめと教えてくれた師の恩も知るやうになるはずで、と仰せ

られました。)

この第六章は、専修念佛の人びとにおいて、親鸞聖人が師弟の問題について、どういふ見方をしておられるかを中心に述べてある。師弟の問題について、以下にその背景を伺いたい。

親鸞聖人は、四十二歳の時、越後から関東へ移られた。性信房の招きに応じられたようである。すでに常陸を中心に北関東に相当な勢力をもつ念仏聖であつた性信房は、法然聖人の高弟であつた親鸞聖人を招いて、自分と一門の念仏聖たちに浄土の教えを伝授していただくとしたようである。法然聖人から『選択集』を伝授され、その御真影まで拝受されていた親鸞聖人をおして、法然聖人の流れをくむといふことは、性信房やその一門の人たちにとって、自分の信心を確立するためにも、また聖(ひじり)たちの社会で、法然聖人の門流としての正当性を承認されるためにも、充分魅力的なことであつた。

やがて親鸞聖人の学徳をしたつて、他の系統の念仏聖や山伏などもその門をたくようになり、また在家の人びとで新たに聖人から法名をいただき、念仏聖となる人たちがたくさん育つていった。

こうした門弟たちは、それぞれ有縁の在所に道場を建て、近隣の人びとに専修念仏の法義を伝え、門徒集団を形成していった。門徒集団は、それぞれの地名でよばれるようになり、性信を指導者とする横曾根門徒、真仏の高田門徒、順信の鹿島門徒、教念の布川門徒、覚円の浅香門徒、専信の三河門徒などはとくに有名である。これらの人びとは、また輩下に多くの道場主を門弟としてもつていった。

道場では毎月二十五日(法然聖人の命日)に法座が開かれ、集まってきた門徒は、法話を聞き、談合し、応分の懇志を寄進したのである。それは「念仏のすすめもの」などとよばれているが、それによつて、道場主の家族の生活費と、道場の維持費がまかなわれ、また親鸞聖人への懇志もそこから出されたのである。

道場では、一人でも多くの門徒を獲得することが、仏法の上からいっても、経済的にいっても重要な意味をもつていた。逆にいえば、道場に所属していた門徒が、他の道場へ移籍するといふことは、大きな問題となつたわけである。本来的には、どこの道場の門徒になろうと、真宗の法義が伝えられていると

ころならばかまわなはずであるが、門徒に離れられた道場主にしてみれば、甚だしく自尊心が傷つけられるといふことと、経済的な損失とが相乗効果を起し、ついに「道場主である師に背いて、他の人に従つて念仏するやうなもの、往生できない」などとまで極論するやうになつたわけである。

こうして門弟や門徒を私物視していくやうになると、一種のなわばり意識が生まれ、門徒争いがうまれてくるやうになつた。このやうな傾向は聖人のご在世中からあつたが、滅後にはいっそうはげしくなつていったやうである。以上は梯實圓師の著作「歎異鈔」によつて述べさせていただいた。

専修念佛のともがらとは、法然聖人がお説き下さつた浄土宗に帰依して、お念仏の一行を浄土往生の道といただいて念仏している人たちのことである。そういう意味で、親鸞聖人も、また聖人に親しく御教化を受けてきた人たちも皆、専修念佛のともがらであつた。現代の私たちも専修念佛のともがらの一員であるし、あるはずである。共に弥陀・釈迦の弟子であつて、すべては阿彌陀仏に救われる機として平等に仏弟子なのである。いわゆる、御同朋・御同行なのである。

そこで、共に念仏往生の道を歩む弥陀・釈迦の弟子でありながら、その中で「私の弟子だとか他の人の弟子だ」とかいつて争うやうなことはあるべからざることでありながら、そういう争いが起こつていふことを唯円房は嘆いておられるのである。そこで、親鸞聖人が生前「親鸞は弟子一人もたすそうろう」と仰せられていたことをここに示されて誤りを正そうとされているのである。

この専修念佛といふ言葉は、大事な意味をもつて「観無量寿經の流通分には釋尊が

「仏、阿難に告げたまわく、『汝好くこの語を持(たも)て。この語を持てといふは、すなわちこれ無量寿仏の名を持つてとなり。』」

と仰せられていた。釋尊は阿難尊者に「よくこの言葉をもちなさい」といわれ、その言葉とは「無量寿仏の御名」であると言われている。無量寿仏すなわち阿彌陀仏の名をもちなさい、と。たもちなさいとは、名を称えることを持続しなさいとの思召しである。そのやうに釋尊は、称念念仏を觀無量寿經の結論のところ仰せになるのである。

しかもナムアミダブツ、ナムアミダブツと口に阿弥陀仏の名を称えることはまことに信じやすいので、易行の念仏と先達はいわれている。歎異鈔第十一章には

「誓願の不思議によりて、たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をととなえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば」と申され、称名念仏はたもちやすくとなえやすい行として阿弥陀仏が思案して定めてくださった行であると示されている。だからお念仏は、私たちが称えやすいようにできあがっており、日常生活の上を保持し続けるようにと、仏様から勧められている行なのである。

そして阿弥陀仏は「名を称えるものを浄土にむかえとろう」と私たちに約束をし、誓いの名を称えることをお勧めになつておられる。私たちはもう少し真剣にこの「仏の言葉」を受け取ってべきである。阿弥陀仏が称名念仏を選び取られて与えてくださる、その思案の深さはどうも私たちには思いはかることはできない。けれどもこの単純なるお念仏でいかほど多くの人びとが救われたであろうか。それこそ数限りない人びとがお念仏に救われたのである。それを思うだけでも、阿弥陀仏のご思案の計り知れないまことが知らされる。

最近では思想家や学者や評論家や作家などが、親鸞聖人のことを語ったり、真宗のことを書いたり、歎異鈔の本を出したりするが、ほとんどお念仏を申すことは言わない。そういう本を読むと、本願は本願思想となり、真宗が真宗哲学となつていくとくである。思想化し哲学化した真宗は、読んだり聞いたりするとなつて面白く、何か深いことを理解して分かつたつもりになり、何か人の知らぬことを知つたような満足感が私たちにあたえられるのである。けれどもそれは、知性の満足だけで、実際には真宗がほとんど身に付かないのを感じる。

真宗の教法はもと「一文不通にして、経釈のゆくじも知らざらんひと」の人に焦点が当てられていて、愚夫愚婦が助けられる道である。人間の知性だけに訴えていこうという真宗思想や真宗哲学には、愚夫愚婦の私たちは容易についていけないのである。いな、ついていっているつもりが、本当は「一つも身にはそいがたし」の嘆きに陥りかねない。ではどうしたら本願の救いを愚夫愚婦の凡夫の身に付けることができるであろうか。それを「案じ」られた

のが阿弥陀仏である。そのところを考えつくして見いだされ、与えてくださったのが、称名念仏の道である。

この道を歩む人びとを専修念佛のともがらという。念仏をお勧め下さるのも仏であり、信心も如来よりたまわる信心である。信も行も、弥陀・釈迦二尊のおはからいによつて私たちがいただく。

であらばいたたく側の人間が「私はあなたの師匠である。あなたは私の導きによつて念仏申す者となり、また信心する者となつた」と、他の念仏者に言うことはできないし、言うべきではない。しかるに「わが弟子、他者の弟子」というのは、阿弥陀仏と人との関係の間に割り込んで、あたかも自分が「阿弥陀仏の救いの協同者」のようにしてしまふ。そうなのである。それは驕慢のわざであり、名利の心である。親鸞聖人が「弟子一人ももたずそうろう」といわれたのは、阿弥陀仏と人の関係をハッキリと知つておられたからである。この聖人の言葉はいわゆる謙遜でもなければ、奇をてらう言葉でもなければ、本願の伝達者としての責任放棄でもない。

阿弥陀仏の本願を仰いで念仏申すものは、すべて阿弥陀仏に直接に向いていて人であり、阿弥陀仏に對して人であること、そのことを知っておられたか。びとも、共に阿弥陀仏と横一列に對面しているのである。ただし、「この人は私の弟子である」とは言えないが、「この方は私の師である」と言うことはどうして言えないことがあるか。(了)